

村松弘一 著

## 中国古代環境史の研究

大川裕子

### はじめに

「環境史」の研究課題を掲げ幅広く活躍する村松弘一氏の著書が出版された。村松氏の論文は、国内外を問わず様々な刊行物に掲載されている。本書を手にとられて、氏の研究内容がかくも廣範に及んでいたのか、と驚かれた方も多くおられるのではないだろうか。これらの諸論文が一冊にまとめられ、村松氏の環境史研究を一望することができるようになってきたことは、學界にとっても大きな喜びである。以下に、まず本書の目次を掲げ概要を紹介する。

#### 一

序 章 秦漢環境史研究の現在

第一部 秦漢帝國の形成と關中平原

- 第一章 黄土高原西部の環境と秦文化の形成 —— 禮縣大堡子山秦公墓の發見 ——
- 第二章 秦の關中平原西部への擴大と地域開發 —— 西垂から雍城へ ——
- 第三章 關中平原東部への遷都と開發の展開 —— 雍城から咸陽へ ——
- 第四章 中國古代關中平原の都市と環境 —— 咸陽から長安へ ——
- 第五章 中國古代關中平原の水利開發と環境 —— 鄭國渠から白渠へ ——
- 第二部 淮北平原の開發 —— 漢から魏晉へ ——
- 第六章 中國古代の山林藪澤 —— 人間は自然環境をどう見たか ——
- 第七章 魏晉期淮北平原の地域開發 —— 咸寧四年杜預上疏の検討 ——
- 第八章 漢代淮北平原の地域開發 —— 陂の建設と澤 ——
- 第九章 魏晉・北魏時代の淮北平原における陂の建設 —— 『水經注』の記載を中心に ——
- 第三部 水利技術と古代東アジア —— 淮河流域から朝鮮半島・日本列島へ ——
- 第十章 中國古代淮南の都市と環境 —— 壽春と芍陂 ——
- 第十一章 後漢時代の王景と芍陂（安豐塘）
- 第十二章 古代東アジア史における陂池 —— 水利技術と環境 ——
- 第十三章 塢から見る東アジア海文明と水利技術
- 第四部 黃土地帯の環境史
- 第十四章 秦漢帝國と黃土地帯
- 第十五章 黄土高原の農耕と環境の歴史
- 第十六章 黄河の斷流 —— 黄河變遷史からの視點 ——

第十七章 澤から見た黄河下流の環境史 —— 鉅野澤から梁山泊へ ——

第十八章 陝西省關中三渠をめぐる古代・近代そして現代

第十九章 洛惠渠調査記

## 附章 東アジアの環境史

本書には一九本の論文＋十章・附章という膨大な数の論考が収録され、テーマ別に四部に分けられている。以下、各部の概要をまとめ、適宜コメントを附して紹介する。

「序章 秦漢環境史研究の現在」の冒頭部分において、著者は陝西省北部・神木縣大保當漢代城址遺跡を紹介し、遺跡をとりまく環境變化の問題について言及する。この遺跡が位置する黄土高原は、年間雨量四百mmのライン、すなわち農牧境界線上に當たる。現在、遺跡の周囲では沙漠化が進行しているが、史念海氏によればこの黄土高原一帯はかつて森林に覆われていたという（第四部参照）。「沙漠のなかの都市。はたして秦漢時代、この都市はどのような環境下にあったのだろうか？」という問いかけから始まる冒頭の一ページを読めば、本書においてこれから展開される「環境史研究」の大枠を理解することができるしかけとなっている。序章では、さらに二〇〇〇年以降の論文を軸に、秦漢時代に限った環境史研究の現状を紹介する。

「第一部 秦漢帝國の形成と關中平原」では、秦・漢帝國が、關中平原の自然環境をどのように利用して勢力を擴大したのかを論じる。第一～三章では春秋初期から統一に至るまでの五五〇年に及ぶ秦の歩みに焦點をあて、襄公が諸侯となつてはじめて據點を置いた黄土高原西部の西垂（著者は大堡子山秦公墓が発見された甘肅省禮縣附近に比定）から、關中平原西部の雍城を経て關中平原東部の咸陽へと中心を遷していく歴史を、環境利用の變化とともに論じている。第四章では、渭水を挟み南北で異なる關中平原の環境に注目しつつ、秦・咸陽と漢・長安の都市について主として都市水利の面から論

じる。第五章では秦の鄭國渠、漢の白渠の灌漑対象區の比較検討を通じて、秦と漢の水利・農業開發の變化に言及する。著者は三百里に及ぶ鄭國渠の渠道を石川河を境に東西に二分し、石川河以東は恒常的に鹽が地表にふき出す鹵地であり、鄭國渠の建設は鹵地の灌漑を主目的としていたと指摘する。秦は領域に限界があったため鹵地を無理やり農地化したのが、漢はこのような開發の方法を繼承せず、白渠建設に際しては石川河以東の鹵地を灌漑対象から外したとする。

以上、第一部では秦漢環境史の實證的研究が示される。とくに、第一―第三章において秦の環境利用の變遷がまとまって通讀できるようになった意義は大きい。この第一部で注目すべきは、元來、鹽・礦物・森林等の資源採取や交易を中心にしていた秦という集團が、關中平原への移動にともない徐々に農業を軸にした國家へと變貌していく様子を論じた點にある。その過程で、周の遺民を通じて周の開發方法（周原で行われていた資源採取・農・牧のバランスが採れた長期可能な開發を取り入れたとする指摘は興味深い。しかし、このようなバランスのとれた秦の自然利用のあり方は、秦が東方六國を意識し、對外的に伸張する時期に變化し始める。鄭國渠建設による大規模灌漑・集約農業の展開と、鹵地さえも耕地化しようとする開發の試みは、秦の環境利用の變化を象徴する出來事としてとらえることができる。

〔第二部 淮北平原の開發 —— 漢から魏晉へ ——〕では、考察の対象地域を淮河北岸に移し、「澤」とよばれる湿地と、人工的貯水施設「陂」を取り上げて、環境利用の變遷を論じる。第六章において、著者は澤を「谷部から平原部への出口で自然堤防からあふれて形成される湿地」であったと定義する。古代、澤は周辺の山や森林とともに「山林藪澤」と總稱されるが、漢代以前は資源供給地として人間に利用されることはあったが、決して開發対象ではなかったと指摘する。第七―九章では、しかし、このような澤が分布する地帯にも、後漢末以降の開發の進展にともない、「陂」が建造されて農地が擴大していく點を明らかにする。とくに第七章では、晉・杜預の上疏文を通じて、淮北の水害と陂との關係について取り上げている。淮北には漢代以來利用されてきた自然バランスに考慮した陂と、三國魏以降の亂開發にともない澤が点在するような低湿地に造られた陂の二種類があったが、低湿地の陂は水害を誘發した爲、杜預はこのような陂を廢して

漢代の開發方法へ回歸することを求めたという。

この杜預上疏は、魏晉期の火耕水耨を伝える数少ない史料として先行研究において必ず取り上げられる。西嶋定生氏が杜預上疏を根據に、漢代江南のみならず三國以降の淮域でも陂灌漑による火耕水耨が一般的な農法であったと指摘したのに対し、米田賢次郎、福井捷朗各氏は、火耕水耨とは陂決壊の際に應急的に採用された農法であり、淮北にはこれとは異なる水稻栽培法が展開したと反論している。著者は、陂と火耕水耨の關係について「農法自體がどうであれ、陂をともしなう耕作を意味していることだけは確かである（一九七頁）」、「漢代以前、この地域は未だ開發の進んでいないところで、陂をともしなう水田耕作である『火耕水耨』が行われ、微高地では陸田が造られていた。（二〇六頁）」と指摘するに止まり、具體的な言及を避けている。著者の目的は陂建設を通じて環境利用の變遷を見ることであり、火耕水耨の農法を議論することではないのだが、陂は本書の中で幾度となく取り上げられており、著者にとって環境を見る爲の重要なキーワードである。その陂によりどのような農業が展開されたのか、環境史的視點から丁寧な説明を加えるべきではなかっただろうか。

「第三部 水利技術と古代東アジア —— 淮河流域から朝鮮半島・日本列島へ ——」では第二部につづき陂に焦點を當て、中國淮河流域で生まれた陂の造營技術の朝鮮半島・日本への傳播を指摘する。第十章では、具體的分析對象として芍陂（安豐塘）を取り上げる。著者は文献史料や安豐塘の發掘成果、さらに一九九一年に淮河中流域で洪水が発生した際に撮影された衛星寫眞を利用しつつ、初期の芍陂は壽縣を洪水から守る遊水池であったが、黄河河道の變化による環境變化や、牛疫の發生による穀物生産減少の流れの中で、後漢以降は灌漑を主目的とする水利施設として役割が變化したと指摘する。芍陂は後漢・建武年間に、灌漑機能を強化する工事が行われているが、その工事を推進したのが黄河治水で著名な王景であった。第十一章では、黄河堤の修築で培われた王景の水利技術が芍陂修理の際に敷葉工法（散草法）として活用されたと指摘する。この敷葉工法は、韓國・全羅道の碧骨堤（百濟・比流王二十七年（三三〇）建造のため池）、さらに日本の河内平野に造營された狭山池（七世紀造營）にも活用されている。第十二章では、芍陂に見られた陂の造營技術が、朝

鮮半島を経て日本に傳播したこと、技術傳搬の擔い手として佛僧を想定する必要性を指摘する。第十三章では、韓國・慶北大學校博物館藏「戊戌塙作碑」（推定五七八年或六三八年造）を取り上げ、ため池型水利施設をめぐる朝鮮半島と中國との呼稱の問題を議論する。中國のため池造成技術が傳播した朝鮮半島では、陂という名稱は用いられず、代わりに塙が使われている。一方中國において、塙は西晉時代に「塙主」という移動集團の據點の意味に使われ、従来、水利施設の意味はないと考えられてきた。著者は、塙に關聯する多くの記載を史料から拾い上げ、その結果、三～六世紀の長江中下流域において、水利施設としての塙の呼稱があったことを確認する。水利施設としての塙の名稱は、中國では主要な語義でなかったため廢れてしまい、朝鮮半島にだけ殘されたのだという。

第三部では、芍陂の造成を中心とする水利技術の傳播の問題を東アジアという廣い枠組みの中で論じて、環境史の持つ「グローバルヒストリー」としての側面を強調する。水利史研究に携わる評者にとっても示唆に富む指摘が多く見られるのだが、その一方で水利技術の傳播については、著者の持ち味である環境史的分析手法を用いたより具體的研究を行う餘地があるように思われる。前述したように、著者は關中における鄭國渠の水利灌溉、渭南地區における長安と昆明池との關係、さらに淮河流域における壽縣と芍陂の關係等、水利施設と背後の環境との關わりについて詳細な分析を行っている。同様の手法で、中國の華南・華北、朝鮮半島、日本各地における立地環境をふまえた水利技術と名稱の變遷についても検討することが可能なはずである。今後の研究に期待したい。

「第四部 黃土地帶の環境史」には、中國の歴史地理研究者である史念海氏や譚其驤氏の學說に依據しつつ、黃土高原そして黄河下流域の環境變遷の歴史を概説した論文が収録されている。史念海氏は、黃土高原はかつて森林に覆われた平坦な大地であったと述べ、歴史上の農業・牧畜の比重がこの地域の自然環境を左右し、とりわけ農業開發が進展する時期には植生破壊による沙漠化が進行すると指摘する。黃土高原の自然バランスは、黄河に流れ込む土沙の量に影響を與える。これを、黄河下流域の氾濫と聯動させたのが譚其驤氏であった。第十四章、十五章において、著者は、これまでの自身の

論考、さらに畫像資料、現地調査の成果を新たに織り交ぜながら、兩氏の學説をなぞる作業を行っている。また、第十六章では、現在の黄河が抱える斷流の問題を歴史的に敘述するという、古代環境史を専門にする著者にしかできない視點で現代の環境問題を説明する。歴史研究者のみならず、中國の環境問題を學ぶ者にとっては重要な導入書となるはずである。第四部で注目すべきは、黃土高原や黄河下流の環境變化が、「澤」の形成・消滅に影響を與えるとする第十七章の指摘である。唐代以前、山東丘陵の一端をなす梁山南麓には鉅野澤とよばれる大濕地帯が廣がっていた。後晉・開運元年（九四四）の黄河決壊により河流が變化すると、あらたに梁山の北側にまで水が流れ出て、結果、梁山の四圍を取り巻く湖沼帯が出現する。水滸傳で有名な梁山泊の誕生である。しかし、南宋・建炎二年（一一二八）、金の南下を防ぐために人爲的に黄河堤が切られ黄河が南流すると、梁山泊は枯渇していったという。著者自身が「地域相互の環境史」（あとがき）と述べるように、黄河流域の自然は相互に大きく關わりながら聯動しているのである。なお、第十八章十九章には、一九九六年に行われた關中平原の灌溉渠・洛惠渠と涇惠渠の調査記録が収録されている。第五章の鄭國渠の論考の基となった調査の記録でもあり、關中乾燥地農業の實態を知る上で重要な資料である。

「附章 東アジアの環境史」では、中國を對象にした日本の環境史研究が、古代史のみならず近代史に至るまで列擧されている。「古代」だけではないため、附章という形で収録されたのだと思われるが、環境史研究の導入書として非常に有益である。

## 二.

以上概観したように、本書では、廣域な空間と長期の時間を對象とした多様性に富む環境史研究が展開されている。つぎに、本書における環境史の分析方法の特徴と若干の問題點を指摘する。



## (1) 本書の分析手法の特徴

著者の論文のタイトル・副題には「AからBへ」という表現が多く用いられている。たとえば、「鄭國渠から白渠へ」「漢から晉へ」「淮河流域から朝鮮半島・日本へ」等々であるが、これこそが著者の環境史の分析方法の特徴であると言える。著者は、歴史史料からAという特定の地域・時代における環境事象と人間の關係性を抽出し、さらにBという異なる時点（或いは地域）における、「それ」を抽出する。そして、AとBの間に、環境の變化、あるいは人間の環境への認識・利用の變化を見いだすのである。その際に重要となるのは、切り取られる空間Ⅱ地域の個性や、時代ごとの環境狀況を丁寧に復原する作業である。長期時間軸でとらえる「地域史」の要素である。著者は対象地域として關中平原、黄土高原、淮北平原さらに黄河下流域を取り上げ、古代史にとらわれず長期間に及ぶ變化を論じている。

著者自身の研究の歩みを記した「私の履歷書」（「あとがき」四八一頁）に目を通すと、著者の研究が数々の國內外におけるシンポジウムや共同現地調査の機會を経て執筆されたものであることが分かる。本書のもつ多様性は、著者がこれまで様々な形で携わってきた共同研究に來源があるのである。課題調査において、プロジェクトの主旨に沿いつつ独自の成果を出していくことは、容易なことではない。しかし、著者はこれらの機會から、独自の着想を得て、あるいは重要なエッセンスを読み取り、その成果を研究に反映させて來た。その最たるものが鄭國渠の灌溉対象區の東半分に廣がる「鹵地（鹽類集積地）」の存在に着目したことであろう。

秦統一の經濟的な原動力となったとされる鄭國渠については、従來、多くの先行研究において言及されてきた。實地調査を踏まえた研究には鶴間和幸氏や藤田勝久氏の論考があるが、いずれも渠首（取水口）のみの調査・指摘にとどまり、灌溉対象區全體への踏査は行われていない。著者は、鄭國渠の灌溉區全般への調査を通じて、一九三〇年代に發生した涇惠渠灌溉による鹽害の教訓、そこから現地でも鹽害防止のため排水路が完備されているという事實を確認する。さらに



『水經注』以降、唐・宋・明・清期の地方志史料を丹念に調べた結果、標高四〇〇メートルライン（故鄭國渠の渠道にあたる場所）に沿って鹽地が點在することに注目する。そこから、著者は鄭國渠の石川河以東の地區は元來、鹽が吹き出した鹵地で、農耕不適地であったという結論に達するのである。戰國期の大規模灌漑が農業生産性を高め、結果として秦の富強に經濟的に貢獻したとする史記以來の評價・定説に疑念を投げかけるのである。

評價すべきもう一つの點は、「澤」の實態についての指摘である。澤を含めた自然は、「山林藪澤」と總稱され、增淵龍夫氏により專制君主權力を支える經濟的基盤であったと指摘されて以來、古代史研究において注目されてきた。しかし、山林藪澤の實態について、つまり、澤がどのように生成されるのか、山と林と藪とがなぜ並記されるかという點は從來ほとんど言及されてこなかった。著者は、黄土高原や黄河下流域の調査を通じて、澤の生成が黄河の動きと聯動している點を指摘、周圍に山林が存在する環境條件についても丁寧に説明している。著者の鹵地や澤への指摘は、環境史の手法を用いることにより古代史研究に新たな風を吹き込む可能性を持つ重要な成果である。著者は、山林藪澤に言及する際、「古代帝國をめぐる議論の中では）國家という枠組みの中での人間の思考のあり方に固執するあまり、その背後にある自然環境と人とのかわりかたというより大きな枠組みを考えることがほとんどなかった（二六五頁）」と述べている。また、「環境史の方法は）人間が生きた時代の社會・國家とはどのようなものであったのかということを考えることにもつながるはずである」とも述べ、（二二頁）、著者が既存の學問を意識していることが窺える。しかし、著者の導き出す結論のほとんどが、環境利用や環境變遷の問題に終始しており、古代社會や國家の見方に正面から挑むような言及は見られないのはまことに残念である。

（2）環境と向き合う人間 —— 主體は誰か ——

序章（三頁）において、著者は本書の目的が「人間と自然環境の關係史」を復原することだと明言する。そして、環境

史を示す語に歐米では「ecological history（人間を生態系の一部としてとらえる）」と「environmental history（人間を自然環境の外に位置づけ、人間がそれにどう對應したかに焦点をあてる）」の二つがあるが、著者は、歴史研究である以上、後者に重点を置くべきだと主張する。また、「人間が自然環境にどのようなにかかわったのか（二二頁）」「自然は人間の生活に影響を興え、人間もまた、自然を開発し、改變・破壊してきた：人間と自然環境史の關係史を『環境史』と呼ぶ（四六五頁）」と繰り返し述べる。著者にとって、自然に對する「人間」は重要なタームであることが分かる。

それでは、著者が各々の論考の中で示す人間とは、歴史上のどのような主體を指すのであろうか。本書が扱う時代や地域は多岐に及んでいるが、環境を認識し利用する主體としては「秦」「漢」「戰國楚」等の國家、或いは時の爲政者が設定されていることが多い。そのような中で、人間としての個が際立つのが第七章で取り上げられている杜預である。ここでは「杜預上疏」を軸に淮北の陂の建設が議論されているため、杜預という個人が際立つのは當然なのであろう。古代史研究において細部を追求することは容易ではない。環境に關わる對象が「國家」「爲政者」となるのは、史料制的制約から致し方ないことなのかも知れない。しかし、自然に對する人間が國家だけではないことは言うまでも無い。例えば正史にも國家主導の開発に對して、「郡人皆以て不便と爲す」（『三國志』鄭渾傳）「郡中追怨す」（『漢書』翟方進傳）などの語が記され、爲政者と民との間に自然認識のズレや、利用に際しての理想と實態の差異が存在していたことが窺える。環境という日常を取り巻くテーマを扱う限り、人間をより細部にまで掘り下げて史料を読み解こうとする視點も重要であらう。

## おわりに

著者は「環境問題は：ひとつの國家の枠組みではとらえられないトランスナショナルな問題である：環境史的視點の歴史學が向かうべき到達點においても、そこには國境はない（二三頁）」と述べる。さらに、環境史は「千年、二千年の時間軸でとらえるべき課題が多い。つまり、環境史をとらえる場合には、これまでの斷代史的な時代區分や古代・中世・近

世という時代区分とは別の歴史的展開を想定する必要があるだろう（二四頁）」と指摘する。これまで、斷代史的な枠組みにとらわれてきた既存學問を超えて、グローバルな歴史研究を「環境」をテーマに進めていく事が、著者の目指すところなのだろう。一方で、著者の研究者としての出發點は秦漢史にあり、本書で取り上げられる多くの具體事例は、古代中國から材料を得たものである。それ故、時代区分を超えたグローバルな環境史の必要性を指摘しつつ、著者自身は秦漢史研究へのこだわりを棄てていないように思われる。今後、どちらに軸足を据えていくのか。著者独自の新たな方法で、評者の感じたこの矛盾が解決されることを期待しつつ、今後の研究に注目したいと思う。いずれにせよ、本書は、中國史をフィールドにした「環境史」研究を理解する上で、必讀の一冊となるはずである。

## 註

- (1) 藤田勝久「關中地域の水利開發——鄭國渠・成國渠の水利遺跡をめぐって——」(『社會科』學研究)二二號、一九九一年)、鶴間和幸「章水渠・都江堰・鄭國渠を訪ねて——秦帝國の形成と戰國期の三大水利事業」(『中國水利史研究』一七號、一九八七年、のち『秦漢帝國の形成と地域』(汲古書院、二〇一三年)収録。
- (2) 西嶋定生「火耕水耨について」(和田博士還曆記念東洋史論叢)講談社、一九五一年、のち『中國經濟史研究』東京大學出版會、一九六五年に加筆収録。米田賢次郎「應劭『火耕水耨』注より見たる後漢江淮の水稲作技術について」(『史林』三八卷五號、一九五五年、のち『中國古代農業技術史研究』同朋舎、一九八九年所收)、「渠陂灌漑下の稲作技術」(『史林』六四卷三號、一九八一年、のち『中國古代農業技術史研究』所收)。福井捷朗・河野泰之「(火耕水耨)再考」(『史林』七六卷三號、一九九三年)。

二〇一六年二月 東京 汲古書院  
 一二二種 八十四八十一一四頁 一〇〇〇圓十稅